

泉 と 小 川

—先史沖縄島の居住地選択—

Springs and Streams : Criteria for Selecting Habitation Sites in the Prehistoric Okinawa Island

安里 嗣淳

ASATO Shijun

ABSTRACT: Prehistoric sites in the Okinawa island tend to concentrate either on sand dunes or coastal terraces. The principal criterion for selecting such habitation sites was their proximity to the sea, inasmuch as subsistence at that time was dependent mainly upon lagoon resources.

The physical environment of these sites also shows another important factor, access to a supply of fresh water. Prehistoric Okinawa people utilized two types of water sources, spring and streams. The former is concentrated in the central and southern part of Okinawa Island, and the latter is more common in the northern district of same. Such distribution occurs due to the geological nature of each area. The former is characterized by a limestone terrace over the impermeable Shimajiri layer, and the latter is characterized by high cliffs and deep valleys along the coastline.

序

沖縄諸島の先史人たちがその居住地を選択するにあたって、日常生活に不可欠な飲料水が確保できる水源に近い場所であることは重要な条件のひとつであったと考えられる。これはきわめてあたりまえのことで、今さら論ずるほどのことでもない、というのが私たちの「常識」であろう。そのような常識の故か、少なくない数の発掘調査報告書には、その遺跡の地理的環境または自然環境の項などにおいて、水源についての詳しい記述や地図への湧水地点などの位置表示がないものもある。地形図は必ず付されているので、小川あるいは小溪流については特に説明がなくてもその存在はほぼ推定できる。しかし、湧水地点の場合は存在していても記述されないと地図からは判断できない。当時の生活史を復元するには、発掘地域の遺構や遺物だけでなく遺跡をとりまく環境のひとつである水源、すなわち生活用水をどこに求めていたかという情報も重要である。発掘調査報告書等でそれについてあまり詳しく触れないのは、あまりにも当たり前すぎるので簡単に記述したか、あるいは近くに水源があったことは確実だろうから、特に扱うこともないだろうということかも知れない。本稿はその当たり前のことを再確認することなので、中・高校生の自由研究程度の域を出るものではないが、各居住地（ほぼ遺跡付近）に伴うとみられる水源が、居住地選定との関係で総体として見るとどういふことが言えるのかを考えてみたい。

いくつかの遺跡と水源との関係を概観すると、水源に近いことは必ずしも居住地選定の最優先順位とは限らないようにも見える。生活用水は日常の暮らしに欠かせないので、ある程度の距離の範囲に水源があることは重要な条件だが、「湯水のように」ふんだんに水が使える直近の場所である必要もないのではないか。居住地の選定は地形など他の条件の方が、水源の「近さ」よりも優先するのではないかということが想定できそうである。居住地と水源とはどのような関係にあるのか、その選定にあたっての優先の度合はどの程度のものか、沖縄島の北部と中部の先史時代主要遺跡について概観しながら検討してみたい。

1. 水源の種類

ここでいう水源とは飲料水を主とするので淡水に限られる。沖縄諸島の水源は地上を流れる淡水すなわち川と、地下から湧き出している泉がある。泉から湧き出た水は流れとなって、小川や小溪流につながることも多い。池などの大きな水溜まりはほとんどない。あるいは居住地（遺跡）に天水溜池の窪みなどの設備があったかも知れないが、確認された例はない。

川はある程度の流れの幅をもつものと、山や丘の斜面の小さな谷筋を流れてくるものがある。小川概念はあいまいだが、ここでは便宜上幅約1 m以上の流れをもつものを小川とし、それ以下を小溪流と呼称することとする。また、県管理の二級河川は小川とは言い難いので、河川と称する。水源としての泉は、その泉だけが源で居住地（遺跡）がその近くに存在する場合は泉とする。主な水源は泉であるがその湧水が流れとなり、さらに周囲の表層水も集めて小川となって居住地（遺跡）が湧水地点よりも近い場合は小川を水源とする。

2. 沖縄島先史時代遺跡周辺の水源

できれば琉球諸島全域について扱うことが望ましいのだが、諸般の事情によりここでは沖縄島の北部と中部の遺跡について検討する。

2-1 北部地域の地形と水源

北部地域は山地が多く、急峻な斜面が海岸近くにまでせり出している。ところどころで海岸陸地が湾入して入江になっており、そこには大小の砂丘地が形成され、その後背地の山の谷間から流れてくる小川が河口となって海に注いでいる。北部の山地海岸はほとんどそのような地形である。入江の砂地には必ず小川が注ぎ込んでおり、北部の東西海岸地帯入江の飲料水は豊富である。また、とくに入江や海浜でなくても、海岸に迫る山の斜面の小さな谷筋から小溪流が流れ出ていることもよくある。

北部地域でも本部半島の北側（今帰仁村）や西北側（旧上本部村）には石灰岩とその風化土壌の台地・丘陵が広がり、中部地域の石灰岩台地・丘陵と似たような地形になっている。

2-2 中部地域の地形と水源

中部地域の北側（石川市南側、読谷村東側、沖縄市北側）には北部地域の脊梁部山地からつながる名護層や国頭礫層などの山地があつて北部の地形に類似しているが、その他の多くの地域は石灰岩とその風化土壌の台地や丘陵が海岸から内陸部まで段丘地形をなしている。

その石灰岩層の下にはクチャと呼ばれる泥灰岩（島尻層）が基盤となっていることが多いが、ところによっては上層の石灰岩丘が浸食によって消え、クチャの風化土壌であるジャーガル（粘土）が地表に露出した台地を形成している地域もある。

沖縄市東部から、北中城村、中城村、西原町にかけての中城湾岸地帯はクチャ・ジャーガルの露頭が卓越する地形である。ニービ（細粒砂岩）も分布している。またこの地域は東海岸側が断層のように崖をなしていて、海岸低地で粘土質ジャーガル土壌の小さな平野を形成している。崖下の東海岸側には、恒常的な流れとしての小川や小溪流はほとんどない。泉もほとんどない。さらにこの断層崖の上端から地形は西寄りにゆるやかに低くなり、嘉手納町、北谷町、宜野湾市などの中部地域西海岸に至る。したがって、この地域の小川はすべて東端に水源を発しながらも反対側の西海岸へと流れている。同じ東海岸でもクチャを基盤とし、上層に石灰岩丘陵が載る勝連半島には泉が多い。

海岸には大小の砂丘が多く形成されているが、西海岸の多くは後背地に石灰岩段丘地形を控えていることから、その小崖下すなわち海岸付近に泉が湧き出ている所がよく見られる。石灰岩台地が広い範囲に展開していることから、北部と比べると泉はかなり多い。河川や小川は具志川市の天願川が西

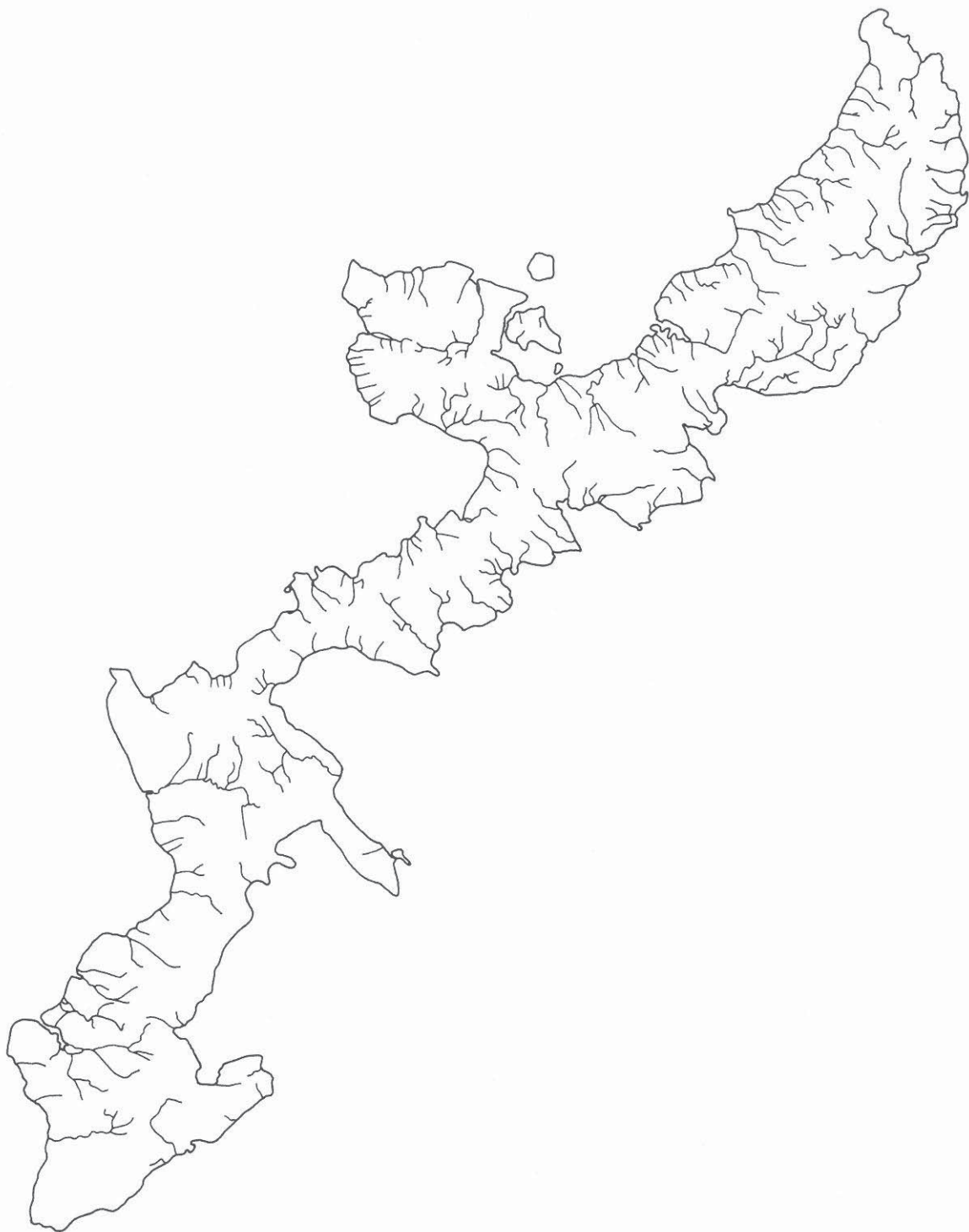


図1 沖縄島の川の分布
「沖縄県の河川・砂防・海岸管内図」(沖縄県発行2003)より調製

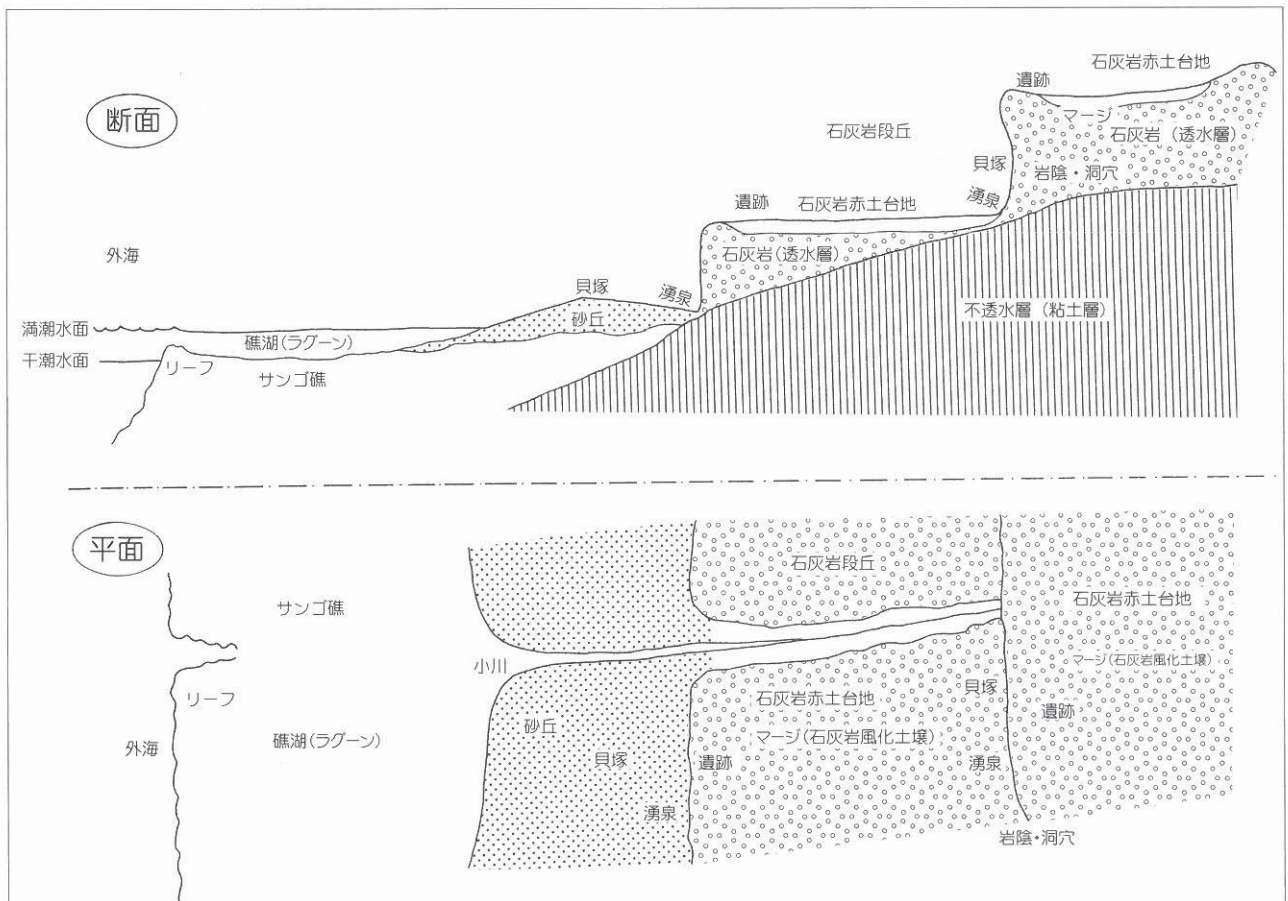


図2. 沖縄島中・南部の石灰岩地帯の湧水と地形の概念図

から東へ流れているほかは、比謝川、大道（野国）川、白比川、普天間川、牧港川、小湾川などが西海岸へ注いでいる。北部のような海岸に迫る山地斜面の谷筋地形はきわめて少なく、小溪流は中部北側でわずかに見られるだけである。

沖縄島には「樋川（ヒージャー）」、「湧川（ワクガー）」と称される水源が主に石灰岩地帯に分布する。その一部は小川や溪流水を堰き止めたり、浅い地下水脈を掘り下げたりしたものもあるが、ほとんどは自然湧水口に人工的な構造物を築いて取水の便を図ったものである。村落の生活用水として長期にわたり利用されてきたものであるが、おそらく先史時代以来の自然湧水で、グスク時代から近世にかけて整備されたものであろう。長嶺操氏は琉球諸島の井戸を調査してその体系をまとめたが、同氏の著作によっても沖縄島の中南部に氏の分類に言う「樋川」や「方形石組井戸」（その多くは湧水）が多く分布し、北部にはかなり少ないことが明らかである（長嶺操1998）。

2-3 湧水の仕組み

上述したように、沖縄島では主に石灰岩地帯に湧水が多く分布する。これは石灰岩が吸水性に富み、地下水をよく浸透させ、あるいは貯えるからである。しかし、それだけでは湧水にならない。その地下水が石灰岩の下層にある島尻層（クチャ）に至ると、この層は不透水層であることからさらに下層へは浸透できず、流れは境界面から横方向に向きを変える。そしてその境界断面である崖下や低地などから泉として湧き出すのである。この不透水層が下層に存在しない場合は、豊富な石灰岩地帯であっても湧水には乏しい。例えば北部の瀬底島はほとんどが石灰岩からできているが、陸地の高さに別の不透水層がないため、地下水はさらに海面下のレベルにまで浸透してしまい、陸地で泉になることはない。

2-4 他の地域の地形と水源

沖縄諸島の他の地域も、大雑把に言えば北部的か中部的地形のどちらかであるといえる。例えば沖縄島南部はクチャ、ジャーガルが若干卓越するものの中部とだいたい似たような石灰岩とその風化土壌（マージ）の台地や丘陵であり、伊平屋、久米島の一部、慶良間諸島などは北部と似て急峻な山地が海岸に迫る地形である。要するに沖縄諸島の地形は大雑把に言えば山地系と石灰岩台地系があり、海岸にはいずれの地形の場合も砂丘地が多く存在するという立地である。したがって、不十分ではあるが、沖縄島北部と中部を扱うことで、概ね沖縄諸島全体の傾向は把握できると考えられる。

2-5 遺跡と水源の種類

以下、沖縄島北部と中部の主な先史時代遺跡と現在確認できる水源の状況を概観する。もちろんあくまでも現在の地形および水源の状況であり、先史人の活動期においてもまったく同様の地形環境であったとは限らない。とくに近代以降の人間の諸活動（開発等）によって、かつての小川や湧水が枯れたり改変されたりしている所もあろう。そのような制約はあるものの、現在の地形環境からでも、どのような水源であったかについての傾向は把握できるものと考え、居住地（遺跡）と水源との関係を次のように分類し、それぞれ該当する遺跡を列挙する。できれば各遺跡の時期を明らかにするのが望ましいが、発掘された時期幅の明確な遺跡が少ないことと、本稿では遺跡の立地ではなく水源との関係を考察するのが目的であることから、時期は明示しない。また、遺跡が単なる一時的な野営（キャンプ）地なのか、居住地なのか、未発掘遺跡の場合には判断が困難なこともある。

また、遺跡の形成地点は必ずしも居住地とは限らないが、概ねその付近であろうと推定する。実際には例えば読谷村渡具知東原遺跡や嘉手納町の野国貝塚B地点などのような貝塚時代早期（爪形文土器期）の遺跡は、流入堆積の可能性もあり、そこが直接の居住地かどうかの判断が難しい。また、貝塚時代前期の伊波・荻堂式土器文化期の貝塚は崖下にあり、居住地は崖上台地と推定されてはいるものの、住居跡の発見例に乏しい。

A. 海浜または海岸小丘に居住し、後背地の谷間から流れる小川や後背斜面の小溪流を利用していたとみられる遺跡

北部地域

国頭村	宇佐浜B貝塚、宇佐浜遺跡、奥第一・第二貝塚、奥第三・第四貝塚、伊地遺物散布地、佐手貝塚、国頭田名貝塚、安波貝塚、辺土名兼久貝塚
東村	東村伊是名貝塚
大宜味村	喜如嘉貝塚
今帰仁村	不明
本部町	兼久原貝塚、浜元サチピン遺跡、山川港原遺跡、
名護市	名護貝塚、溝原貝塚、部瀬名貝塚、久志貝塚
宜野座村	不明
恩納村	伊武部貝塚、熱田貝塚、熱田第二貝塚、仲泊貝塚群、久良波貝塚

中部地域

読谷村	渡具知東原遺跡、長浜貝塚（？）
嘉手納町	嘉手納貝塚、野国貝塚、野国貝塚B地点、
石川市	不明
具志川市	宇堅貝塚、苦増原（部分的鍋底地形による集水域の小川、泉もあり）
与那城町	不明、小川や小溪流がほとんどない

勝連町	不明。小川や小溪流がほとんどない
沖縄市	不明。比謝川の上流にあたるが、その各支流の元は泉である
北谷町	不明
北中城村	不明。先史遺跡がほとんど分布してない。
中城村	不明。
宜野湾市	不明。
浦添市	牧港貝塚、浦添貝塚、(ただし、両遺跡とも湧水の可能性のある地形環境)
西原町	不明

B 石灰岩台地縁辺付近や海浜に居住し、付近から湧き出る泉を利用したとみられる遺跡

北部地域

国頭村	不明
東村	不明
大宜味村	不明
今帰仁村	渡喜仁浜原遺跡、兼次貝塚、
本部町	具志堅貝塚、知場塚原遺跡、備瀬貝塚、屋比久原遺跡(?)
名護市	不明、大堂原遺跡(?)
宜野座村	前原遺跡
恩納村	不明

中部地域

読谷村	連道原貝塚、木綿原遺跡、赤インコ遺跡、吹出原遺跡(伝承のみ)、浜屋原貝塚群、大道原遺跡、中川原貝塚、大久保原遺跡、
嘉手納町	不明
石川市	伊波貝塚、石川貝塚、古我地原貝塚
具志川市	アカジャンガー貝塚、地荒原遺跡、上江州貝塚、大田貝塚、苦増原遺跡(小川も)
与那城町	シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡、
勝連町	平敷屋トウバル遺跡、平安名貝塚、幸地原遺跡、津堅貝塚(島の反対側に湧水)、浜貝塚、
沖縄市	明道遺跡、仲宗根貝塚、室川貝塚、馬上原遺跡、八重島貝塚、知花遺跡
北谷町	砂辺サーク原遺跡、伊礼原B遺跡
北中城村	不明(先史遺跡未発見)
中城村	旗立山遺跡
宜野湾市	大山貝塚、喜友名貝塚、大山水賀志原遺跡、真喜名志富盛原遺跡、安座間原第一・第二遺跡、宇地泊兼久遺跡、
浦添市	不明。石灰岩台地多く、湧水の可能性あるが、遺跡との関連は不明。
西原町	不明(先史遺跡きわめて少ない)

3. 沖縄島中・北部地域の先史遺跡と水源との関係の特徴

以上見てきたように、沖縄島中・北部はその地形的特徴から山地水脈を源とする北部の小川・小溪流水源系と石灰岩台地地下水を源とする中部の湧水系に分けられる。もちろんこれは大雑把な系統であり、いずれの地域にも小川や湧水は存在する。先史遺跡を残した人々は、北部地域においては主に

海岸入江の砂丘地に居住し、そこに後背地から流れてくる小川や小溪流の水を生活用水として利用していた。中部地域においては、主に石灰岩台地の地下から湧き出してくる泉の水を生活用水として利用していた。しかし、北部でも本部半島北部や北西部の石灰岩台地では中部と同じような水利用であり、中部の一部海浜遺跡では北部の小川利用と同じであった。

3-1 居住地選定の最優先条件ではない水源

いずれの地域においても生活用水は日常生活に不可欠であったことは確実であるが、砂丘遺跡を除いては居住地（ほぼ遺跡形成地付近）の多くは、必ずしも水源のすぐ隣に形成されてはいないことも指摘できる。非砂丘地における居住地はほとんどが石灰岩台地（あるいは丘）の縁辺部一帯の微高地であり、湧水はその崖下や離れた低地にあることが多いのが事実である。主な遺跡は次のとおりである。

北部地域 長根原遺跡、渡喜仁浜原貝塚、知場塚原遺跡、屋比久原遺跡（?）、

中部地域 吹出原遺跡、赤インコ遺跡、知花遺跡、仲宗根貝塚、明道遺跡、馬上原遺跡、古我地原貝塚、伊計仲原遺跡、宮城島シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡、地荒原遺跡、喜友名遺跡、

居住地の選定にあたって水利用の利便性を最優先したのであれば、かれらは台地の上ではなく、もっと水源に近い崖下の泉付近に居住したことであろう。台地上に住み、毎日の飲料水を崖下に求めるための昇降の労働は比較的難儀なことである。にもかかわらず、かれらは敢えて小高い台地、丘陵上に居住していた。「序」で想定したように、水源は必要不可欠ではあるが、それへの近さよりも台地の上や微高地という地形であることが、居住地選定にあたっての優先度が高かったことを示している。それは周囲がよく見渡せるという安全性や、崖下に比べて明るく湿気が少ないという快適性を求めている選定であろうと推定される。それを満たした上で、それに次ぐ条件が水源に近いことであったと考えられる。それは、台地、微高地であっても中央部にはほとんど居住地（遺跡）は分布していないこと、非砂丘系の遺跡の多くは崖下の泉を控えた台地縁辺部に形成されていることによる。

3-2 沖縄島北部海岸地帯の先史遺跡の少なさ

山地に富む北部地域の東海岸側には小川や小溪流が多い。ほとんどの海岸地域は飲料水に不自由しない環境である。ところが、先史遺跡はきわめてわずかである。また、分布する遺跡の規模もかなり小さく、人口的にもわずかで時間的にも短期間の居住であったと見られる。このことから、水源が豊富であればそこに人々が居住するということではないことを示している。おそらく山地の急峻な斜面が海岸まで迫り、低平地は小さな入江に小砂丘が存在するだけであり、加えて広大なサンゴ礁湖に乏しいこと、石材入手などのための外部世界との連絡が困難なこと等人間の生活活動への支障が多いことが、先史人の居住地としての魅力を欠いていたものと考えられる。北部西海岸でも、似たような地形のある大宜味村、国頭村地域の海岸は同様に遺跡が少なく、あっても小規模である。比較的規模の大きな安定した遺跡（居住地）が見られるのは大宜味村の喜如嘉貝塚や国頭村のカヤウチバンタ遺跡だけで、そこは比較的広い砂丘低地あるいは石灰岩台地があり、前面の海は広いサンゴ礁湖が控えている。

3-3 中部中城湾岸地帯の先史遺跡の少なさ

一方、中部東側の中城湾岸地帯も先史遺跡がきわめて少ない。2-2で述べたように、この地域は島尻層（クチャ）が卓越し、石灰岩台地に乏しく、湧水はほとんどない。また、湾岸沿いに断層崖が連なり、そこから西海岸へ向けて地形はしだいに低くなることから、小川は湾岸地帯にはほとんど形成されない。先史遺跡は石灰岩丘陵地形で湧水に富む勝連半島側に分布するだけで、他の湾岸地帯は皆無といってもよい。さきに先史人の居住地選択は水源が最優先順位の条件ではないと述べたが、それ



図3. 沖縄島の「樋川（ヒージャー）」と「方形石組井戸」の分布
すべてではないが、これらの多くの水源は湧水である
長嶺操原図（1998, p. Ⅰ・Ⅳ）より調製

に次ぐ条件ではある。したがって、降雨以外にまったく水源がないというのも居住地としての条件を欠いているといえる。

沖縄貝塚時代の早期末から中期にかけて、沖縄市や北中城の石灰岩台地には先史人たちが居住していた。その後、海洋への適応を強めていく後期になると、沖縄諸島のほとんどの地域で先史人たちは海浜砂丘に居住するようになる。ところがこの後期の遺跡が勝連半島を除く中城湾岸地帯の砂丘にはまったく存在しないのである。前面の海の貝や魚の食糧資源はけっして貧弱ではない。室川貝塚や荻堂貝塚から出土する貝や魚はこの湾岸海域から入手している。それにもかかわらず貝塚時代後期人たちが中城湾岸地帯の砂丘に居住しなかったのは、水源が存在しなかったことも重要な理由であったと考えられる。先述したように水源は直近でなくてもよいが、中城湾岸地帯はあまりにも水源が遠く不便すぎるというのが当時の先史人たちの認識であったのだろうか。同じ中城湾岸でも勝連半島では居住地（遺跡）が集中しているのは、石灰岩丘陵下に湧き出す泉が多いことも選択の一条件であったからだと考えられるのである。

結

先史時代において、日常生活で不可欠な水（主に飲料水）が自然状態で得られる泉や小川は、居住地の近くにあるのが望ましいことは常識であるが、沖縄島中・北部の具体的な居住地選定と水源との関係においてもこのことを再確認できた。しかし、一方では水源が豊富であるにもかかわらず遺跡の分布に乏しい、すなわち先史人たちがほとんど居住しなかった地域もある。あるいは湧水利用の場合にも直近にではなく、一般に崖下あるいは窪地、低地にある湧水地点を避けて、上方の台地縁辺に居住している。これらのことから、水源があること、あるいは水源により近いことは居住地選定の最優先順位の条件ではなく、地形等別の優先すべき条件に次ぐものであったことも指摘できる。

このような事実から、居住地の選定において水源地を確保するというのは生活活動の方法のひとつにすぎず、実際にはもっと大きな適応戦略としての地域選定があり、それをふまえたうえで生活用水の確保も条件にして地点を選定したのではないだろうか。例えば、安里進氏は浦添市、宜野湾市南部すなわち旧浦添地域の海岸砂丘に展開する大小約20の沖縄貝塚時代後期の砂丘遺跡は、前面の海のサンゴ礁湖（ラグーン）、背後に石灰岩台地が広がる地域に群をなして分布する「浦添群」ともいうべきものとして括ってとらえている。そして大規模遺跡は拠点的な集落で、小規模遺跡は枝集落であろうとし、礁湖を単位とした群を構成する各遺跡（集落）は礁湖内での漁労の協業を軸にした共同体を形成していたと推定している（安里進1991, p6-8）。具体的な範囲の括り方の可否は別として、この捉え方や視点はきわめて重要である。砂丘遺跡が形成された後期の時代には、海洋への適応がこれまでで最も高い位置に達し、前面のサンゴ礁湖を主な生業の場とした生活活動が営まれていたことは、すでに明らかにされていることである。したがって、後期の時代にはサンゴ礁湖という生業の場を確保できる位置に居住することが重要であり、それを満たした上で水源の近くを条件としたものと考えられる。

このことからすると、中部の中城湾岸地域において後期の遺跡がほとんど分布していないことは、必ずしも水源の有無や遠近ではなく、海洋が生業の場としての魅力に乏しかったことも一因として考慮すべきだということになるのだろうか。しかし、中城湾の場合は生業の場としても遠浅の海であり、特に資源が乏しいということはいえない。事実、同じ湾に面している勝連半島先端の広大な砂丘遺跡平敷屋トウバル遺跡は海洋資源を豊富に利用したことを示している。この湾岸ではやはり水源の問題がもっとも大きな要因として働いたものと考えられる。北部東海岸の場合は、広大なサンゴ礁湖に乏

しく、狭い礁湖に外海の荒波が押し寄せる地形は先史時代人を遠ざけたといえる。

同じように、後期に限らずその以前の縄文時代並行期においても、生業や安全、域内交易など水源以外の諸条件も含めての居住地選定がなされたものと考えられるべきであろう。すでに繰り返し述べたように、水源に近いことは最優先順位の条件ではなく、それに次ぐ条件である。すなわち、生活活動・生業活動を主として展開する「地域」を総合的な条件から選定し、次にその地域内において安全、利便性（交通・交易等）、衛生（快適性）などを条件とした「地点」を選定したものと考えられる。この地点選定にあたって二次的に選定されるのが水源である。

（あさと しじゅん：所長）

引用・参考文献

安里嗣淳 1992 「先史沖縄諸島人の交通」『史料編集室紀要』第17号、沖縄県立図書館史料編集室。

注 この拙稿で「居住地選択の第一の条件は具体的には水源であり」と述べているが、論考の内容は本稿と基本的に同じであり、「第一」は最優先順位という意味ではなく、「重要な」という意味に理解されたい。

安里 進 1991 「第Ⅱ章 位置と環境」『嘉門貝塚A』、p6-8、浦添市教育委員会

長嶺 操 1998 『琉球の水の文化誌』、沖縄村落史研究所、沖印社

嵩元政秀・安里嗣淳 1993 『日本の古代遺跡47 沖縄』、保育社

沖縄県教育委員会 1977 『沖縄県の遺跡分布』

沖縄県土木建築部河川課 2003 「沖縄県の河川・砂防・海岸管内図」『おきなわの川と海』

国頭村教育委員会 1987 『国頭村の遺跡—詳細分布調査報告』

本部町教育委員会 1991 『本部町の遺跡—詳細分布調査報告書』

名護市教育委員会 1982 『名護市の遺跡2）—分布調査報告』

宜野座村教育委員会 1981 『宜野座村乃文化財（Ⅰ）—遺跡分布調査報告書』

金武町教育委員会 1990 『金武町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告』

石川市教育委員会 1986 『石川市の遺跡』

与那城村教育委員会 1988 『与那城村の遺跡—詳細分布調査報告書』

勝連町教育委員会 1993 『勝連町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告』

北谷町教育委員会 1994 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書』

沖縄市教育委員会 2002 『沖縄市の遺跡—第2次分布調査報告書』

中城村の遺跡 1992 『中城村の遺跡—詳細分布調査報告書』

宜野湾市教育委員会 1989 『土に埋もれた宜野湾』

浦添市教育委員会 1990 『浦添市文化財悉皆調査報告書』

※ 発掘の実施された遺跡についてはそれぞれ発掘調査報告書がある。沖縄島中・北部の当該文献を掲載するとかなりのページになるので、本稿の参考にはしたが掲載は省略した。

（私事ではあるが、本稿は娘：泉の大学卒業にあたり、その名に因んで記した考古随想である）